

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生3・4年 小説の部 最優秀賞

「ふしぎなふしぎなだが子屋さん」

東明小学校三年 前川 葵

今日は七月二十一日、まちにまった夏休みがはじまった。わたしは西村ひな、東京にすむ小学六年生。今日から一か月、年長の弟りくとといっしょに、石川県にあるおばあちゃんの家遊びに行くんだ。おばあちゃんは一人ぐらし。家はまつとうえきの近くにあって、八十年つづくだが子屋さんなんだ。でも、わたしはおかしがあんまり好きじゃない。あつ、でもジューズとかゼリーとかアイスは好き。

おばあちゃんの家に来て六日目の朝、わたしとりくとは朝ごはん作りのお手伝いのおれいに、おばあちゃんからラムネをもらった。二人で店の中のいすならんですわって飲んだ。はじめて飲んだラムネは、冷たくてとてもさわやかな味がした。東京では、お母さんはケチだから、いつもおまつりとかでもラムネを買ってくれない。スーパーで安くなついても買ってくれない。だから、心がるくなつたみたい。うれしかった。

りくとは、ラムネをごくごくたつたの三十びょうでのみほした。のみ終わると、中のビー玉が気になって、大きくふりふりした。すると、ビンのキャップを外せることが分かって、わたしに

「お姉ちゃん、開けて！」

とおねだりした。わたしがキャップをぎゅつとひねって開けてあげると、りくとはよろこんでビー玉を取り出した。そのとき、りくとの足元にうんわるくペットボトルがあつて、りくとは、それにつまづいてこけてしまった。ビー玉がりくとの手から、するりとぬけて、コロコロと転がっていった。ビー玉は、おかしがならんでいるつくえのところまでころがっていった。りくとは、おいかけてつくえの下でつかまえた。その目の前に、小さな小さな戸があつた。りくとはその戸を開けようとしたしゅん間、おばあちゃんがきゆうに

「そのとびらを開けたら大へんなことになるよ。」
と大きな声で言った。わたしがびっくりして

「何で？」

と聞くと、おばあちゃんは何かを言いかけてやめてしまった。「とにかくぜったいだめやからね。」
そう言うとおばあちゃんはどこかへ行ってしまった。

午前九時、お店がはじまると小さな子どもをつれたお母さんや、おこづかいをもつてはしつてきた小学生、あと、おばあちゃんと話に花をさかせるきんじよのおばあちゃんたちでいっぱいになった。でも、おひるごはんの時間くらいからすいてきて、そのうちだれもいなくなつた。おばあちゃんが、

「お店がおちついてきたから、ちゅうもんをしてくるね。たくさんあつてたいへんやから店番をたのむね。」

と言つて、お店のおくの古い黒い回す電話のところに行つてしまつた。

しばらくしてもおきやくさんは来ない。れいぼうのきいた気持ちのいいお店の中、わたしは、いつのまにかねむつてしまつていた。

とつぜんガチャツと音がして、はつと気がつくと、りくとがかつてにおばあちゃんが開けたらダメと言つていた戸を開けていた。わたしは、たいへんなことになるといっておばあちゃんの言葉を思い出して、こわくて目をつむつた。すると、中から、

「やつ、ふうー、気持ちいい。ひさしぶりに出られたぜい!!」

「ひまだつたからね。」

と、男の子と女の子の音がした。わたしがゆっくりと目を開けると、小さなようせいが二人出てきた。りくとはびっくりしてにげだそうとして、店のいすにつまづいて、こけてしまった。

わたしは、こけたりくとおこしながら、ゆう気をふりしぼって、

二人に話しかけた。

「あっ、あの……」

すると、女の子のようせいが答えた。

「何？ってか、あなたはだあれ？」

「わたしはひな。こっちのべんけいのなきどころをおさえているのは、弟のりくとだよ。今、おばあちゃんにたのまれて、店番をしているんだ。あなたはだれ？もしかしてようせいなの？」

「そうだよ、わたしはようせいのララ。こっちはアクト。よろしくね。」

なんだ。大へんなことになるっていうからびっくりしたけど、かわいいのが出てきただけで、大へんなことなんておきないじゃんってわたしは心の中で思った。でも、ふとりくの方を見ると、アクトがりくとのいたそうなべんけいのなきどころをやりでつつこうとしていた。

「いたっ！」

りく트가さげんだ。そしておこりながら言った。

「何でこんなことするんだよ!？」

するとアクトは答えた。

「えっへっへ、くやしかったらやりかえしてみろよ。」

……大へんなことって、もしかしてこの男の子のようせいのことかなってわたしは思った。

その様子を見てララは言った。

「わたしたち、本当は神様のお手伝いがおしごとなんだけど、アクトがわるいことをいっばいするから、神様に入出口を閉じられて、こっちに来られなくなっただよ。六十八年間もここに来られなくてひまだったんだ。」

ララは、かなしい顔で言った。

「そうだったんだ。」

わたしもかなしい気持ちになった。

ララはアクトをつれて、小さな戸に帰っていった。

その次の日。今日はお店はお休み。朝ごはんを食べた後、おばあちゃんとりくとは、まっとうえきに電車やきかん車を見に行つた。わたしもさそわれたけど、ようせいたちが気になって行かないと言つた。二人が出かけた後、わたしが小さな戸をノックすると

「はい！」

と、へんじがして、ガチャツと戸が開いた。

「何かよう？」

とララの声が出た。この戸は、ふういんがとけたら、自分で開けられるんだとわたしは思った。

「今アクトは何をしているの？」

「今はねているの。しずかにね。」

「うん！」

とわたしが小さな声で言ったとき、アクトがあくびをしながら目をさました。

「おはよう。」

とアクトが言ったので、わたしたちも

「おはよう。」

と返した。アクトのおなががぐつとなつたので、ララは言った。

「わたしもおなががすいたから、スーパー天使に行つて、食りようを買ってくるね。」

そして、ララは戸のむこうへ行つてしまった。

アクトと二人きりになって少しふあんもあつたけど、アクトはふつ

うに話しかけてきた。

「そのたなにのっているおかし、食べてもいいか？」

わたしはもちろんこう答えた。

「食べたらだめだよ。」

すると、アクトは少しふてくされて言った。

「なんだよ、いっぱいあるからいいじゃねえか。」

「ここはだか子屋さんで、これはみんな売っているおか子だから、食べるとしても買ってから食べてね。」

わたしはあきれた顔で言った。

「なんだよ、お前はおか子がこんなにあつたら食べたくならないのかよ。」

「ならないよ。だってわたしはおか子きらいだからね。」

「へー、おか子きらいなやつなんているのかよ。びっくりしたぜ。」

アクトは目をまんまるにして言った。そして、アクトはまたわるだくみを思いついた。

「お前さあ、この店つぐ気あるのか？」

アクトはわたしに聞いた。

「ないけど、それがどうしたの？」

わたしはなんでそんなことを聞くのかふしぎに思いながら言った。

「それならこの店つぶしちやおうぜ!!」

わたしはびっくり

「えっ、いやだよ！なんでそんなこと言うのよ!？」

「でも、この店をつぶしたら、東京の家でおばあちゃんと毎日すごせるぜ!!」

わたしは、それがぜったいだめって分かっているけど、それっていいかもしれないと思ってしまった。だって、おばあちゃんとすごすのは、いつつもすごく楽しくて、大好きだから、ずっとはなれたくないんだもん。

「なっ、いいと思わないか？」

アクトはニヤニヤしながら言った。

「ちょっといいかもしれない。」

わたしは、つい言ってしまった。

「じゃ、今すぐしようぜ!」

急に、ゴゴゴゴゴゴ……とひくくて強そうな音が聞こえてきた。その音は、どんどんちかづいてきているようだ。

「何の音？」

わたしはアクトに聞いた。

アクトはふるえながら金魚のブクブクぐらい小さな声で

「やべえ、ララだ。」

とつぶやいた。

そして、音が戸のすぐ前でピタッと止まった。

「アクトオー!」

ララは目をつり上げて、口さけ女みたいなおそろしい顔でおそってきた。

大へんなことになるっておばあちゃんの言葉は、アクトじゃなくてララのことだったのかと思いつつわたしは気ぜつってしまった。

わたしの大好きなウインナーのやけるにおいがした。ジュージューおいしそうな音もしている。目を開けると、わたしはいつの間にかふとんにねていた。すると、おばあちゃんがわたしにきいた。

「大丈夫かい？」

「うん、大丈夫。ありがとう。」

それから、夜ごはんを食べてねるじゅんぴがおわった後、おばあちゃんか

「二人とも、ちょっとこっちに来て。」

とわたしたちを小さな戸の前につれてきた。

「開けちゃダメって言われたのに、開けたのだあれ？」

とおばあちゃんは笑顔で聞いた。わたしは、いつもの笑顔じゃなくて、やくそくやぶっておこっている笑顔って感じがした。でもりくとは、

「はい、ぼくです。」

すなおに言った。

「この戸を開けたらようせいが出てきただろう。わたしもね、七十年くらい前に会ったことがあってね。ランドセルの中におかしをつめこまれたり、だが子屋さんのかん板をお肉屋さんのかん板と交かんされたり、いろいろあったよ。でも、もう一人の女の子のようせいはいろいろなことを手伝ってくれてとてもたすかったよ。」

わたしはおばあちゃんもたいへんだったんだなと思った。そして、おばあちゃんはずづけた。

「たいへんだったけど、けっこう楽しかったよ。でも、男の子のようせいが店をつぶそうとしだしてね。神様にお店がつぶされないようにお願いしたんだよ。」

「それで、神様が戸をふういんしてくださったんだね。」

わたしは、おばあちゃんの言っていたたいへんなことが、お店をつぶされることなんだと分かった。

「さあ、そろそろねようか。」

おばあちゃんが言った。

「おやすみなさい。」

わたしとりくとはおばあちゃんにあいさつをしてふとんに行った。

しばらくしても、わたしはねむれなかった。そこで、もう一度戸のところに行ってノックしてみた。

「はい。」

またララが出てきた。そしてララが言った。

「わたしもひなちゃんと話したかったの。あのね、さつきはびっくり

させちゃってごめんね。アクトがひなちゃんにお店をつぶすように言っていたのが分かったから、本気でおこっちゃったの。この六十八年間ではんせいしてると思ってたから、がっかりしたわ。」

「そうだったんだね、ララはお店をまもるのにおこってくれたんだね。でもわたし、このお店がなくなったら、東京でおばあちゃんはずっといっしょにすめるかもってアクトに言われたとき、ちよつといいなっと思っちゃった。本当にごめんね。」

わたしはララにあやまった。

ララはどこからかビー玉を持ってきて、のぞいて見るように言った。わたしがそれを見ると、十さいくらいの女の子が、お母さんといっしょにうれしそうに店番をしている。お父さんも帰ってきてとつてもしあわせそう。

「この女の子、だれか分かる？」

ララが聞いた。今いるのと同じ店だから、わたしは

「おばあちゃん？」

と分かった。

「この店はね、おばあちゃんとおばあちゃんのお父さんお母さんとの思い出がたくさんつまっている大せつなお店なの。だって、おばあちゃんが生まれたときに作られたお店だもん。」

ララは教えてくれた。わたしはよく分かって

「だから、おばあちゃんは神様におねがいしてお店をまもったんだね。」

と言った。

つぎの日の朝、目がさめたわたしはだいどころに走った。

「おばあちゃん、わたしにこの店をつがせて!!」

わたしの大きな声が家の中にひびいた。

今日もいいお天気。ラムネがたくさん売れそうだ。